様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１０日現在

機関番号：　３２５１４
研究種目：　基礎研究（C）
研究期間：　2008～2010
課題番号：　２０５２０１２８
研究課題名（和文）　沖縄のエイサー芸能の生成過程の解明―「手踊りエイサー」の様式性に着目して
研究課題名（英文）　The formation process of Okinawan Eisā dances－an analysis of the 'te-odori' (hand dance) style

研究代表者
酒井　正子（SAKAI　MASAKO）
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号：００００９２６２７

研究成果の概要（和文）：沖縄本島北部に伝承される「手踊りエイサー」は、現在盛んな太鼓の群舞とは全く異なるスタイルのエイサーである。殆ど知られていないその実態を調査し、全体像と芸能史的な位置づけを探った。その結果約６０集落で伝承を確認、曲目や歌詞、演奏スタイルの違いなどから、いくつかの系統や地域性が見出された。また近代には舞台芸能や流行歌を取り込み、戦後は太鼓エイサーへと進化し、1980 年代以降は創作エイサーの強い影響を受けるなど、芸能の変遷とダイナミズムが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This project researched 'Te-odori' (hand dance) eisā, a little-known dance style found in the northern part of the Okinawan mainland that is quite different to the better-known drum-accompanied eisā styles. The study verified current transmission in some 60 villages and, based on differences in song titles, lyrics, and performance styles, identified a number of distinct lineages and regional variations. The recent adoption of stage arts and popular songs, and the strong influence of modern Eisā drumming styles since the 1980s, places te-odori eisā in the context of a dynamic modern performing arts world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：琉球弧の音楽文化
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学、芸術史、芸術一般
キーワード：沖縄、民俗芸能、手踊りエイサー、太鼓エイサー、現地調査、旧盆、青年会、歌掛け

１．研究開始当初の背景

(1)沖縄のエイサーは「勇壮な太鼓踊り」として広く知られるが、北部の本部（もとぶ）半島では全く異なるスタイルがみられる。手踊り中心の「手踊りエイサー」で、男女の踊り手が円陣を組み、三線弾き（地謡、地方）との間で活発に歌を掛け合いつつ、２０曲以上を立て続けに踊ってゆく。地域固有の「シマ（集落）エイサー」ともいい、おそらく現在隆盛の「太鼓エイサー」の源流として、芸能史的にも重要な位置を占める。しかしその実態は、小林公江・幸男の先駆的な研究以外殆ど知られて

こなかった。

(2)小林によれば手踊りエイサーは今帰仁村、本部町、名護市名護・屋部地区の殆どの集落（字）で伝承されてきたが、近年、流行の「太鼓エイサー」を導入する動きもある。集落ごとに状況や様式は異なり、同時期（旧盆）に広範囲で実施され、流行に敏感な青年層により担われるため変貌著しく、その全体像の把握は容易ではない。

(3)「手踊りエイサー」の歌唱スタイルは多様である。踊り手が地謡と歌詞を分け合ったり、一部を反復したり、歌詞以外の囃子詞を掛けたりする。二者以上で掛け合うことにより口承的な歌謡が生成されてゆく過程は、歌掛けが盛んな奄美地域で観察できる。「手踊りエイサー」も、掛け合いの原理により成立した芸能ではいだろうか。さらには奄美と沖縄北部は「歌掛け文化圏」ともいえる共通の基盤を想定できるのではないか。以上の問題関心より本部半島の手踊りエイサーを研究対象とした。

２．研究の目的

(1)「手踊りエイサー」の集落レベルの伝承実態を記録・観察・資料化し全体像を得る。

(2)基礎資料の分析、比較考察により系統や地域性、歴史的変化を探り、エイサーの生成変化の過程の一端を明らかにする。

(3)流行の「太鼓エイサー」と伝統的な「手踊りエイサー」の相克と伝承意識など、現代的な芸能文化のダイナミズムをみていく。

３．研究の方法

(1)現地調査；旧盆行事・実演や試演の映像収録、伝承組織・練習方法・歌詞の聞き取りなどをおこなう。有力な字、伝承の復活・変更・断絶、特徴的な芸態等に注目し、AV 資料や歌詞集など現地資料も収集する。

(2)資料整理と記述；テープの編集やメモの整理、曲目の確認、歌唱の書き取り、採譜などにより、集落レベルの資料集を作成する。

(3)分析・比較検討；実演にもとづく歌唱形式や曲目、歌詞等を検討し、その地域性やエイサー以外の芸能との関連性などを探る。

４．研究成果

集落レベルの資料集作成、および今帰仁・本部・名護の手踊りエイサー比較、国頭村・大宜味村の女エイサーとの比較考察は、おもに小林によりすすめられた。以下に既刊資料と比較の表をあげる（2008 年以前は//で区切った。掲載は『関西楽理研究』『京都女子大学紀要』『沖縄芸術の科学』『奄美沖縄民間文芸学』等）。

① 集落レベルの資料集

・今帰仁村；仲宗根/玉城/崎山/兼次/今泊/与那嶺/越地/平敷//諸志/謝名
・本部町；健堅//東/瀬底
・名護市；屋部/大兼久/宇茂佐

②比較表

・手踊りエイサー曲目比較（今帰仁村 17 集落）［小林 2008：50］
・女エイサーと手踊りエイサーの曲目比較［小林 2009：68］
・瀬底と名護地区の伝承曲［小林 2010：5］

これらの報告を参照しつつ、明らかになった点を述べる。

(1)実施状況；最終的に今帰仁村 17 字、本部町 22 字、名護市 19 字（主に名護・屋部地区）で伝承を確認。当該地域の殆どの字を網羅する。元来旧盆の祖先供養の芸能として青年達が旧 15～16 日、あるいは 16~17 日にかけて家まわり（門付け）をしたが、現在全戸を回ることはなく、概ね旧盆 13～15 日の間に集落内のアジマー（十字路）や新築などで招待された家を回っている。そうしたシマ（集落）まわりは専ら青年会に任されており、彼らは集落外のスナックやホテルなども回って寄付を集める。盆明けの旧 16 日は遊びの日で、所によってはシマまわりの他、集落全体の遊びが、広場で櫓（やぐら）を囲んでおこなわれる。シマまわりではカチャーシーを前後に置きつつ５～６曲を選択し、広場の踊りでは大きな円陣を組んで概ね全曲が演奏される。旧盆以外では本部町ではシヌグの後の余興として、また名護市大兼久では戦前は旧８月の村踊りで、戦後は旧盆に家まわりをしていたが近年は夏休み期間に、夏まつりとして広場でおこなっている。

(2)調弦と曲目；「本調子」から「一二揚」へ、２種類の調弦ごと、あるいは連続して計 20 曲余をあたかも一曲のように繋げて速いテンポで演奏し、名護市大兼久等では、再び「本調子」の曲に戻って終了する。一括して「エイサー節」とも呼ぶ。曲目は多くの場合、《念仏》や門付け歌の《二合小》を中心に数々の流行歌を加えて構成されているが、各地域毎にその構成や順序が異なる。

●今帰仁村は伝承曲数が多く、共通の基本レパートリーは「本調子」では《稲摺節》《テンヨー》《久高万寿主》《スーリ東》《今帰仁ぬ城》《海やからー》等、「一二揚」では《カマヤシナー》《ダンク節》《谷茶前》《海ぬちん法螺》《仲座兄》《だんじゅ嘉例吉》《デンスナー節》《赤山》《イルサスナー》等 。また半数以上の集落で伝承される準基本レパ

ートリーは、「本調子」では《伊舎堂前》《健堅辺名地》《九年母ん木》《三村節》、「一二揚」では《だんじゅ嘉利吉》《加那ヨー》《一七八節》《汀間とぅ》である。東側と西側で異なるレパートリーとしては、西側に《念仏》《前田節》《一路平安》《唐船どーい》／《蔓葉》《ヨー加那ヨー》《副業節》、また東側に《苺小》《あさぎぬ前》がある。西側は《念仏》→《二合小》で開始するが、東側は《念仏》がなく《二合小》から開始する。

●本部町は一般に《二合小》→《念仏》で開始する。その他の現行の主なレパートリィは、「本調子」では《稲摺節》《テンヨー》《海やからー》《糸満人》《今帰仁ぬ城》《前田節》等、「一二揚」では《カマヤシナー》《ダンク節》《谷茶前》《海ぬちん法螺》《仲座兄》《遊ビヌ清ラサヤ》等 。

●名護市名護地区；多くは《久高万寿主》が第１曲目で《念仏》が続く。門付け歌の《二合小》は伝承していない区も多い。元来盆ではなく豊年祭で演じた所では門付け歌が不要だったのではないかと指摘されている[小林 2010]。その他の曲は「本調子」では《稲摺節》《テンヨー》《スーリ東》《越来節》《三村節》《今帰仁ぬ城》《苺小節》《伊舎堂前》《ヘイヨー節》等、「一二揚」では《カマヤシナー》《下庫裡小》《ダンク節》《谷茶前》《海ぬちん法螺》《仲座兄》《だんじゅ嘉例吉》等 。

●名護市屋部地区；宇茂佐や屋部は名護地区に近く《久高万寿主》から始まる。その他の区はそれぞれに異なる展開である。《二合小》は伝承されているが、後半におかれる場合が多い。その他の曲は「本調子」では《稲摺節》《テンヨー》《スーリ東》《越来節》《三村節》《今帰仁ぬ城》《苺小節》《伊舎堂前》《一路平安》《海やからー》《目出度い節》等、「一二揚」では《カマヤシナー》《ダンク節》《仲座兄》等。

(3)地域的特色

●今帰仁村；早くから各字で旧 16 日夜の広場の踊りが定着したため、多人数で時間をかけて全曲目を演奏することができ、伝承曲数が多い。レパートリィは本部や名護とかなりの部分で共通するが、それでも今帰仁独特のレパートリィが多く、特に「一二揚」にその傾向が強い。今帰仁は本部・名護に比べより多様な曲を取り込み、保持してきた。そして今帰仁としてのまとまりを明確に示しつつも、東と西の違いがあり、その境界では両者の影響が混じり合っているといえよう[小林 2008]。踊りの所作は、円陣のカチャーシー風な手舞いと歌に合わせた方向の変化が基本だが、西側の今泊・兼次・諸志・平敷・越地では舞踊風に振り付けた縦列の踊りもみられる。

●隣接する本部町北部の伊豆味や旧上本部村の具志堅・新里にも縦列があり、また輪の外側の腕を前に出す今帰仁の特徴的な所作もみられる。これらの集落は今帰仁と類似の様相を示している。なお具志堅は当て振りの曲が多い。新里でも「マガヤー（仲門兄）」という当て振りの滑稽な曲が特徴的で、かつては備瀬、具志堅でもみられたという。

●本部町西南部；アジマーと招待の家まわりが中心で、「一二揚」を省略する傾向が強い。広場の踊りでは、健堅本字・大東山で「一二揚」がおこなわれているのを実見したが、三線弾きはベテランで、青年層はできなくなっている（後述）。歌唱は、他地域に比べ歌詞本文を分け合う掛け合いが多彩で動的である。舞踊面では円陣の手舞が基本で、崎本部・健堅・渡久地・伊野波・谷茶辺名地・瀬底等で後進する動きがみられるのが特徴的である。

●名護市名護地区；テンポは今帰仁・本部（♩≒100～130）に比べると遅め（♩≒90～100）で、舞踊は「本調子」では扇や四つ竹を持つ振り付けられた踊り（これは後述の舞台芸能の影響だろう）、「一二揚」はカチャーシー風の基本の手舞が多い。東江・宮里などでは、旧 16 日の青年のエイサーを見て、手舞いの優雅さを吟味して村おどりの配役を決めたといわれる。世富慶は村おどりはなく、旧盆に手踊りエイサー全曲を区民こぞって広場で踊る。曲目や採り物などの傾向が他とは異なる。1969 年に国立劇場に出演、早くから外部に知られた字である。

●名護市屋部地区のうち、名護地区に近い屋部・宇茂佐の舞踊は名護地区と同様の傾向だが、本部寄りの西部は「本調子」も基本の手舞が多めである。総じて屋部地区は名護地区と本部の中間的な諸相がみられる[小林 2010]のが興味深い。なお近年、名護市街地を中心に太鼓エイサーの導入が盛んで、「手踊りエイサー」はもっぱらベテラン頼みとなり、青年層でおこなうのは屋部・宇茂佐と名護地区の世富慶・城くらいである（(5)の③参照）。

(4)エイサーのダイナミズムと伝承意識

①瀬底から名護地区への伝播と変容；第二次大戦前、農地の狭い本部町瀬底島では季節的な農業労働に出る人が多かった。その出稼ぎ先でエイサーを教えたという話をよく聞く。当時から瀬底は芸能が盛んであったことがうかがわれる。古くは明治 40（1907）年頃には中部の宜野湾でエイサーを教え好評だった[酒井 2011]。また名護地域の大兼久、宮里も明治末ころ瀬底の人に教えられたといい[字誌]、世富慶や為又でも瀬底が関わった可能性がある。戦後は港や城が瀬底からエイサーを習っており、東江を除く名護地区全域で瀬底の関与が語られている[小林 2010]。仮に

明治末～大正期に瀬底から名護へ伝わったとすれば、現在まで両地域はどのような変遷をたどったのだろうか。小林の比較検討によれば、両者の共通曲は多いが、本部一般に流布する曲よりはむしろ、瀬底にあって本部一般に稀少な《スーリ東》《東前門》など6曲が、まさに両者の関連を物語っていよう。さらに《板床ドンドン》など瀬底との関連を深く示す曲も数は少ないが名護で伝承されている。またどちらか一方だけで伝承される曲は、おそらく瀬底から名護へ伝習後にレパートリィに組み入れられたもので、《汀間当》《鳩間節》など、多くは昭和初期までに大流行した舞踊曲や歌劇が豊年祭の演目になり、エイサーにも取り込まれたと考えられる。

②「一二揚曲」の途絶と伝承への努力；本部町瀬底は現在も伝承意識が高く、他集落や高校生の力を借りず自前の青年会で演奏を続けている。また 2004 年以来手踊りエイサー主体の「もとぶ青年エイサーまつり」を開催する原動力ともなっている。しかし第二次大戦後、エイサー途絶の危機が何度かあり、それらを乗り越えて今日に至っている経緯が明らかになった。元来5班に分かれておこなってきたが、戦後は若年層で多数の戦死者を出し、「自然な伝承はできなかった」という。そこで青年たちは意識的に先輩から伝習し、レパートリィと歌詞を再興。55 年頃より中部のコザに移住した人たちが編纂し、60 年に初めて手書きの歌詞集を発行した（これは瀬底小字のスタイルである）。地元では地謡の減少とともに班ごとの実施は難しくなり、60 年代より一つに統合、もっぱら5班（石嘉波小字）のスタイルで指導された。地謡の不足はベテランで補い、曲数は減少したが一二揚もおこなってきた。85 年に瀬底大橋が完成。本島と地続きになったことで青年会メンバーが増え、対岸の渡久地の繁華街を門付けして収入増につながったが、旧盆をゆっくり過ごす気分は失われた。90 年頃から地謡の継承が難しく「一二揚曲」は省略。そうした危機にあって 98 年に模範演唱 CD がコザで完成。歌詞集を編纂したグループが中心となった。地元の青年たちもそれを機に「昔の曲に戻そう」との機運が高まったが、全 27 曲を演奏するのは時間がかかりすぎ、また歌の掛け合いなどを覚えるのも困難なため、引き続き「本調子」だけを全曲おこなって現在に至っている。以上 60 年、90 年、98 年頃が口頭伝承を維持できなくなる転換期であることがわかる。しかし「シマからエイサーを無くしてはならない」という一念が世代を超え伝承の契機となってきた[酒井 2009、2011]。他の集落も大なり小なりそうした事情があるのではないか。伝承のための歌詞集や音声資料の作成と活用がなされ、「エイサー節」の工工四（楽譜）化も、本部町大浜、今帰仁村仲宗根、名護市大兼久など、比較的都市化した地域でみられる。

③太鼓エイサーの導入；沖縄市を中心に興隆する「太鼓エイサー」の迫力ある演舞は青年たちに人気があり、青年会活動の活性化のため導入する動きが継続してみられる。しかし太鼓を多数そろえる財力と、長期にわたる厳しい練習が要求され、容易ではない。また従来の「手踊りエイサー」は飛び入り自由で、輪になって打ち解けて踊る一体感がかけがえないものであり、全員参加型の芸能として根強い支持と伝統がある。以下両者の交錯を、小林資料に酒井の聞き取り等を交えみてゆきたい。

●今帰仁村；名護市に接する東側での導入が先行し、60 年代に天底が沖縄市嘉間良・北谷町謝刈より、また 80 年代に湧川が名護市港より習ったとされる。天底では手踊りエイサーは次第に行われなくなるが、湧川では旧 16 日に 櫓 を囲んで老壮年によりおこなわれ、青年達はそれに参加するが伝承はできていない。さらに 2004 年に渡喜仁が1曲のみ湧川から習って他は自分たちで振り付け、また西側の崎山も湧川から習った。手踊りエイサーは渡喜仁では青年達も継承するが、崎山は老人中心で伝承が危ぶまれている。2010 年には仲宗根が糸満市大里より導入。青年達は、手踊りエイサーも同時に継承していきたいと語っている。

●本部町；備瀬が 52 年頃から勝連町（現うるま市）屋慶名エイサーなどを取り入れ定着させたが、近年スタイルを一新。手踊りエイサーは老人達が行ってきたが、三線弾きも少なく、伝承が危ぶまれる。東は 70 年頃、具志川市（現うるま市）赤野のエイサーを導入。浮き沈みがありながらも 2007 年に大東山エイサーとして再復活。一方手踊りエイサーは 06 年に婦人会がアジマーまわりをした。また 08 年以来合併を記念して開催されている大東山盆踊り大会で、櫓を囲んでおこなう。青年達も加わるが老壮年が中心である。

●名護市久志地区；辺野古は 62 年にコザのエイサーを参考に太鼓エイサーを導入、64～65 年に沖縄青年エイサー大会（現青年ふるさとエイサー祭り）で優勝し、全島エイサーコンクールにも出場。以後も盛んに行われてきた。なおこの地区には手踊りエイサーの伝承はない。

●同屋部地区；「屋部若獅子会」は 80 年頃旭川の有志が母体となり現在は屋部に本拠地を置く、任意の太鼓エイサー団体。屋部の青年有志も加わり、その影響で字の手踊りエイサーの参加者が減少している。安和は 80 年頃手踊りエイサーの曲に太鼓エイサーを振り付けた。手踊りエイサーは本調子のみ広場

で、壮年中心に行うが、青年は太鼓エイサーのみである。宇茂佐は 2010 年より太鼓エイサーを導入。青年は両方の伝承を試みているが、太鼓エイサーへの参加者が多い。
●同名護地区；為又は 90 年代に辺野古より習い、太鼓エイサーを盛んに行っている。近年は全島エイサーまつりや石川のエイサーまつりに出場。手踊りエイサーは伝承が絶え、02 年に復活したもののその後は行っていないようである。港も辺野古より導入、手踊りエイサーはやらなくなった。大兼久では大東は 87 年ころ、手踊りエイサーの曲に太鼓エイサーを振り付けた。大西が 09 年、また大北も 03 年ころからおこなっている。大西では夏まつりで太鼓エイサーの他手踊りエイサーもごく一部踊られ、大北では手踊りエイサーは老壮年を中心に伝承されている。宮里は 97 年に太鼓エイサーを導入、名護市の青年団「やんばる船」（後述）の太鼓エイサーを譲られたという。太鼓エイサー導入時は手踊りエイサーも両方行うという条件で始めたが、次第に太鼓中心になっている。
●最後に名護地区東江（あがりえ）の導入の過程をみていこう。1987 年ころ、地域青年会は参加者が少なく崩壊しつつあり、伝統芸能は田舎くさいと思われていた。そこへ創作エイサーの草分けである「琉球国祭り太鼓」の斬新な演舞に刺激を受け、数人のリーダーが創立者の目取真武男氏に指導を乞う。彼らは区の手踊りエイサーに取り込みたいという考えと、琉球国祭り太鼓の支部として活動したいという考えに二分された。前者は、88 年に東江の手踊りエイサーの曲に琉球国風の振り付けを試みる。振り付けは手踊りを横で踊ってもらいながらおこなった。足の運びは手踊りのまま、旋回を工夫して入れ、太鼓のバチさばきは琉球国に似せた。円陣ではなく縦列にし、テンポは遅くなるので曲数を減らし、本調子 16 曲を「中抜き」して 10 曲に、一二揚げ 6 曲は 4 曲にした。曲の順番も若干変更したが、本調子→一二揚→本調子という枠組みは保持した。伝統的な枠組みを使いつつ変化させていった過程（前記の安和や大東でもみられた）が注目される。２ヶ月かけて夏までに振り付けを完成、太鼓をそろえるため寄付を集めた。当時和太鼓 11 個を揃えた演舞は評判を集め、あちこちに呼ばれた。一方後者は、琉球国祭り太鼓の名護支部を結成したが、92 年 12 月に琉球国と袂を分かち（後述）、任意団体の名護市青年団「やんばる船」を発足。以後青年の交流活動を展開、地域の活動と全国規模の芸能イベントで活躍する。93 年にエイサーを振り付けたが、94 年に沖縄市諸見里エイサーを導入、それまでのエイサーは宮里に譲った。なお、80 年代より名護市青年エイサー祭りが開催され、太鼓エイサー団体が一堂に集まり演舞している。2010 年（第 21 回）は、本部から初めて瀬底が参加し、手踊りエイサーを披露した。

④クラブチーム型（創作）エイサーの進展と青年会；前記東江の例では、エイサーの担い手である青年達の活動理念と、芸能の創造過程が密接に関わっているのが興味深い。「琉球国祭り太鼓」は、当初女性は太鼓を叩けず、またリオのカーニバルなど「世界を目指す活動」を提唱。しかしそうした方針と相容れなくなって脱退し、「やんばる船」を作ったのだという。その際本部出身の女性は本部に帰って「八重桜華団」を、また今帰仁出身の女性は「いまじん太鼓」を創設し、出身地域で活発な活動を開始した。当時、琉球国名護支部のもとには、北部の創造的な逸材が集まっていたのである。「やんばる船」のリーダーは「ぼくらは何のためにやっているのか、地域のために役立とうというのが目的。エイサーをするために青年会にくるのは逆で、楽しければそれでいい、というので終わってはいけない。現在は他集落の青年が多数、エイサーをするためだけに集まり酒を飲んで騒いでいる。他集落の若者が来て東江区のことをするのはおかしい。生まれ育っているからこそ地域のことをやるんであって、他集落の人は東江区に対する愛情が感じられない。趣旨がはずれている」と語っている。「地域のための」活動の一環なのか、あくまで芸能を追求するのか。二律背反的な対立がそこにはつきまとっている。82 年の琉球国祭り太鼓に端を発する「創作＝クラブチーム型エイサー」の台頭を正面からとりあげた久万田晋は、次のように論じている。地域の自治会の下部組織としての青年会エイサーと、任意団体としてのクラブチーム型エイサー団体とでは、存立基盤や条件が根本的に異なっている。「ウチナーンチュの心意気」を受け継ぎ、革新的な演技によって沖縄の「民族」アイデンティティの表現をめざすクラブチーム型の台頭により、エイサーが日本本土や海外へ広がった。それに伴い元来戦後の現代的芸能として創作性を持っていた青年会エイサーは、伝統的な側面や地域に根ざす「民俗」芸能としての性格が、より強調されるようになってくる。エイサーは沖縄の「民俗芸能」としての基盤に片足をおきつつも、内外で現代沖縄の民族アイデンティティを表現する「民族芸能」へと飛躍・離陸しつつある[久万田 2011:239]。前述の琉球国名護支部の展開は、そうしたグローバルな活動に刺激され自立した芸能集団を目指しつつも、地域に戻って地域の素材を生かしつつ創造してゆく、第三の道をとっているのではないだろうか。

(5)「手踊りエイサー」による研究の可能性
①歌唱形式の分析；酒井は、本部町瀬底と東

の全曲について歌唱形式（歌詞の実際のうたわれ方の形式）を抽出した上で比較検討し、次の３点を指摘している。1)歌詞本文は複雑な歌唱形式を持つ。2)歌詞本文以外のハヤシ詞が豊富で、意味のあるハヤシ詞を連ね掛け合い効果を生んでいる。3)特定の人名をあげその人の噂をうたう、ウワサ歌傾向が顕著である。1)では、４句体歌詞の半分にあたる２句体単位でのやりとりが圧倒的に多く、また一句を分けてうたったり、複雑な歌詞反復の形式がみられる。これらは奄美と共通する要素も少なくない。オーラル（口頭的）な歌謡の生成を考える上で示唆に富む。さらに不定型歌詞やウワサ歌傾向が随所にみられ、とくに一二揚の曲にそうしたあそび心や逸脱、きわどい文句など、即興的な掛け合いの妙味が感じられる[酒井 2011]。民謡の三線曲でも一二揚調に情歌（恋歌）、それも相手への呼びかけ、訴えかけ、応答という形が多くみられる（仲程昌徳）というが、「モーアシビエイサー」ともいわれる手踊りエイサーの真髄はまさに一二揚にあり、省略傾向にあるのは何とも残念だ。

②本部半島以北のエイサーとの比較考察；本部半島以北の大宜味村・国頭村には、三線を用いず女性のみが演じる「女エイサー」が分布している。小林により 1973 年以来集落レベルの詳細な芸能調査が継続されてきた地域である。手踊りエイサーと比較分析することにより、今後様々な研究の可能性があろう。やや特殊な事例ではあるが、小林幸男による大宜味村謝名城の報告は興味深い（2010、関西楽理研究 XXVII)。女エイサーと男女の手踊りエイサーをともに旧８月１０日の豊年踊りに先だって演じるのである。小林によれば女エイサーは「七月手」といい、明治 38(1905)年の日露戦争戦勝祝いで踊られた後豊年祭に先立つ払いとして行われるようになった。また手踊りエイサーは大正４（1915）年の天皇即位祝いで初めて披露され、その後青年達が盆の門付けや豊年祭の余興に演じたと伝わる。土着の女エイサーの上に流行の手踊りエイサーが入ってきた重層性が垣間見られる。以上みてきたようにエイサーとは、常に流行変化してきたジャンルであり、個別の曲目や歌唱、テンポや所作などの総合比較により、芸能の伝播や受容の実相が明らかにされる可能性が、手踊りエイサーの研究をとおして開けてゆくと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１４件）
① 小林公江、沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底エイサーとの関係、関西楽理研究、査読有、XXVII、2010、1―16
② 酒井正子、瀬底エイサーの伝承と歌詞・同その２、奄美沖縄民間文芸学、査読有、９・１０号、2009・2011、107-116・95-112
③ 小林公江、小林幸男、女エイサーの音楽（その１）、沖縄芸術の科学、査読無、21号、2009、61―84
④ 小林公江、小林幸男、今帰仁村の手踊りエイサー；本部半島の他地域との比較を通して、沖縄芸術の科学、査読無、20 号、2008、43―63
http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN10170660_ja.html
http://www.okigei.ac.jp/sougou/hukenkiyo23.html

〔学会発表〕（計５件）
① これからのエイサーの継承について、久万田晋、2008、沖縄市文化センター

〔図書〕（計５件）
① 酒井正子、三弥井書店、沖縄の手踊りエイサーにみる掛け歌の諸相（福田晃他編歌の起源を探る所収）、2011、出版確定
② 久万田晋、ボーダーインク、沖縄の民俗芸能論、2011、368
③ 小林公江、小林幸男、自費出版、沖縄県名護市の大兼久エイサー、2010、64

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕「手踊りエイサー」ホームページ開設を計画中

６．研究組織
(1)研究代表者
酒井　正子（SAKAI　MASAKO）
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号：00092627
(2)研究分担者
小林公江（KOBAYASHI　KIMIE）
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：40195772
久万田　晋（KUMADA　SUSUMU）
沖縄県立芸術大学・付置研究所・教授
研究者番号：30215024
(3)研究協力者
小林幸男（KOBAYASHI　YUKIO）
京都教育大学・名誉教授